若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

千里の道の今二歩目？

札幌厚生病院
木村（きむら）　郁登（いくと）

函館市出身、札幌市育ち、札幌医科大学卒業。今年で遂に札幌歴が函館歴を上回りました。札幌がとても好きで最近の再開発ラッシュに喜んでおります。写真は卒業旅行で訪れたバチカン市国から日本へハガキを出すところ。

はじめまして、札幌厚生病院研修医１年目の木村郁登と申します。前回の筆者である倉富先生から話をいただき、実に元日から書き始めているところです。このような執筆の機会をいただけたこと、大変嬉しく思います。そして引き受けてくださった次の先生、本当にありがとうございます、心から感謝しております。

さてテーマですが、過去多くの先生方が題として設定しているであろう趣味について、私も書きたいと思います。

１つめは陸上､これは近年私が最も傾倒していることです｡800mを高校より始めるものの、勉強＞＞部活の学校の方針のため、出場試合数の制限などもあり、思うように練習できない高校時代を過ごしました。自分が納得できる練習で、どこまで到達できるのかを知りたいと思い、大学でも陸上を続けることを決意しました。迎えた１年生の東医体では自己ベストを大きく更新し、決勝まであと一歩に迫りました。残り５年間でどこまで成長できるのかと胸を躍らせた矢先の2020年､あの憎き新型コロナが到来し、２～４年までは部活停止と試合中止でモチベーションは皆無。ようやく５年で再開し、ほぼ２分ジャストの記録で自己ベストを再び更新しました。６年は春先から調子が良かったものの２分は切れず。（一種の指標となる〇〇分台、この場合800mで言うと１分台）東医体でも体調不良やあと一歩のところで３回とも決勝に残ることができませんでした。元インターハイ選手や全道常連選手からみれば１分台はたやすいものかもしれませんが、高校時代は支部予選落ちだった私から見れば、まさか到達できるとは思わなかった１分台に手が届きかけたために、口惜しさが残ったまま引退をしました。そんな状態で諦めがつかない私は社会人になっても細々と競技を続けております。今年度は惰性で続けていたゆえ、あまり良い記録を出していませんが、恐らく競技を続けられるのは研修医までだと思いますのでラスト１年、どんな形であれ悔いの残らないように今年度はやり切りたいと思っています。

と、いうのが気持ちの上での抱負なのですが、あくまで趣味の範囲で続けていて、良い記録が出なくとも、走ることは楽しいということにも改めて気づきました。偶然、道外にいる高校時代の陸上部の後輩に誘われ、旅行を兼ねつつ何度か一緒にレースに出たり、病院の部活でマラソン大会に出場する機会がありましたが、非常に楽しく、様々な楽しみ方があるなと実感しました。2026年も道外のレースを予定しており、まずは楽しみながら、そして狙えれば良い記録を目指して今後もランニングを続けようと思いました。

２つ目の趣味はピアノです。陸上に続いてこちらも私の経歴紹介に始まり、大変恐縮ですが少々お付き合いくださると幸いです。幼少期から始め、小学生からコンクール出場など本格的に習い始めました。進学をきっかけに中高は完全にブランクとなりましたが、大学入学後のコロナ禍で時間を持て余したときに再開しました。私は試合や試験など何においても目標がないと頑張れないタイプですので、実力試しの意味も含めて大学時代も複数個のコンクールに出場しました。小学生で複数入賞経験のあった私は、なんとなくセンスで上位大会進出や入賞できるだろうともくろんでおりましたが、テクニックの差を痛感することになりました。小学生の頃は習い事としてピアノに通う人も多いですが、大学や社会人の年齢になってもコンクールに出場する人は大概、習い続けて基礎もしっかりあり、かつコンクールにもしばしば出場していたつわものか、音大出身だが音楽活動はせず社会人をしている、そんな背景の人が多いと、私は思っております。中高６年間という圧倒的なブランクがある私は音楽の知識も浅く、テクニックも不足しております。特に右手の中指と環指が、ペンを握った時のあの角度に癒着してしまっており、環指の独立運動に苦労するという、なんとも初心者かのような事態に直面しています。暇があれば中指と環指の間をもっぱら揉んだり動かしたりしており、周囲には不審に思われていそうで不安ですが、この腱？あるいは筋膜？の癒着をはがす方法をご存じの方はご教示ください。前置きが長くなりましたが､現在の私は新曲の譜読みをしつつ､練習曲と指の間の揉みでかつての動きを取り戻そうと奮闘しております。週２回程度の練習頻度で、６年かけて固着した指を剥がすのにどれほど時間を要するかは不明ですが、ピアノこそ生涯続けられる趣味であると思いますので、焦らず楽しみながら続けようと思います。

まとめに入ろうと思い、書いた内容をふと振り返ると、大学時代に毎年書かされた部誌の内容とほぼ変わらないことに気づきました。代わり映えのない…いや、継続できている証でもあると思っております。私事の話ばかりでしたが最後までお付き合いいただきありがとうございました。今後何らかの寄稿をすることがあれば、また同じこと書いているな…と思えるような将来を願ってこれにて筆をおきたいと存じます。